

令和6年度
 県南教育事務所重点施策に関する調査結果について

学校教育課通信
 令和7年3月14日 第208号
 編集・発行：県南教育事務所 橋本美弥子

令和6年度末の調査結果及び本年度の取組等から、県南域内の幼稚園・小・中学校の評価数値と共に、成果と課題を記載しました。自校の調査結果と比較しながらご覧いただき、次年度の学校経営に生かしていただきたいと思います。調査へのご協力ありがとうございました。
 (○成果 ▲課題(今後に向けて))

1 資質・能力の育成と学力向上 (数値目標3.5)		10月調査		2月調査			
		小学校	中学校	小学校	中学校		
1	学校としての学習指導の方向性の確認	授業改善の視点や授業周辺部の取組(家庭学習の方法等)について、共通理解を図る場を設定し、実施している。		3.5	3.6	3.8	3.8
2	全国学力・学習状況調査	全国学力・学習状況調査の問題を解いたり、自校採点したりする機会を位置づけ、実施している。		3.6	3.2	3.7	3.3
3		全国学力・学習状況調査結果から、児童生徒の課題等、学力・学習状況を把握している。		3.6	3.5	3.7	3.7
4		全国学力・学習状況調査結果分析を受けて、自校の課題解決に向けた学習指導の充実・改善に具体的に取り組んでいる。(年間指導計画や日課表、週月案、学習指導案等への適切な反映、校内研修計画の修正・改善等)		3.3	3.1	3.4	3.5
5	ふくしま学力調査	ふくしま学力調査結果から、児童生徒一人一人の学力の伸びを把握している(分析ツールを活用するなどして)。		3.1	3.4	3.4	3.6
6		ふくしま学力調査結果から、非認知能力や学習方略等の実態を分析し、把握している。		3.1	3.1	3.4	3.4
7		ふくしま学力調査結果から、伸びの見られた学年・学級・児童生徒等の要因やよい取組を職員間で共有している。		3.0	3.1	3.4	3.4
8	エビデンスに基づく授業改善	各種調査結果分析・検証の結果について、学校全体で共有し、調査実施学年以外の学年や調査実施教科以外の教科等の指導改善等を行っている。(2月調査のみ)		/	/	3.3	3.4
9	主体的・対話的で深い学びの視点での授業充実・改善	学習指導要領に基づいて目標、指導内容を資質・能力の3つの柱で捉え、単元(題材)及び本時のねらいを設定し授業を構想している。		3.3	3.2	3.5	3.3
10		ふくしまの「授業スタンダード」に基づき、主体的・対話的で深い学びの視点を取り入れた授業の工夫・改善に努めている。		3.4	3.5	3.5	3.5
11		各種調査結果において課題の見られた点を中心に、校内研修等を適切に実施している。		3.4	3.1	3.6	3.5
12	カリキュラム・マネジメントの確立に向けて	各種調査結果分析をもとに取組を検証し、次年度のグランドデザインや現職教育(校内研修)計画等に適切に反映させている。(2月調査のみ)		/	/	3.5	3.6
13	資質・能力の育成を支える基盤づくり	教師自身の言語環境を整え、指導技術を高めるとともに、聞き方や話し合いの仕方などを習得させ、学び合う集団づくりに努めている。		3.2	3.1	3.5	3.6
14		教科等の目標や内容を見通し、言語能力、情報活用能力(情報モラルを含む)、問題発見・解決能力等求められる資質・能力の育成のために、教科等横断的な学習を充実している。		3.1	2.9	3.2	3.1
15		幼・小・中・高の学びの円滑な接続を意識した取組(架け橋期カリキュラムの作成・実施・改善、異なる校種間での対話の機会等)を行っている。		3.3	2.9	3.4	3.3
16		自己マネジメント力の育成に向け、基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立や充実のための取組を行っている。(ふくしまの家庭学習スタンダードを指針とする等)		3.3	3.2	3.5	3.4
17		ふくしま活用力育成シートや全国学力・学習状況調査問題(授業アイデア例や、『一発検索くん』)を、授業や校内研修において活用できるような環境整備をしている。		2.9	2.6	3.2	2.9
追加質問	授業改善グランドデザインについて(R6年8月発行)	「課題克服のための授業改善3つのポイント」を活用し、教師が「話す」授業から、教師が「みる」「きく」「つなぐ」授業への転換を図るために、すべての子どもが「学び出す」「学び合う」「学びとる」授業へ改善を進め、授業改善チェックリストを活用している。		3.0	2.8	3.4	3.2
成果と課題	○授業と家庭学習の連携と朝学習における基礎・基本の定着、単元末における習得や活用の時間の設定を行うことで、学習のサイクル化による学力向上を図ることができた。(小学校) ○全国学力・学習状況調査での課題を現職教育の中で明確にし、対応策について話し合った。その対応策を、国語科・算数科以外でも活用している。(小学校) ○ふくしま学力調査の結果について、分析支援プログラムやグラフ化ツールを用いて、成果があった取り組みを共有することができた。(小・中学校) ○教師のコーディネート力が向上したことにより、生徒の思考をより交流させ、新たな視点で物事を捉えられるようにする生徒主体の授業が確立されつつある。(中学校) ▲全国学調、ふくしま学力調査の結果を活用し、非認知能力向上の手立てを明らかにしていくことが課題である。(小学校) ▲教師が「話す」授業から生徒主体の授業に転換していくために、教師が「見る」「聞く」「つなぐ」を意識して授業改善をする必要がある。(中学校)						

2 生徒指導と道徳教育の充実 (数値目標3.5)			10月調査			2月調査		
			幼稚園	小学校	中学校	幼稚園	小学校	中学校
(1)	一人一人が安心して学べる授業づくり・居場所づくり	① 不登校児童生徒を新たに出さないように予防に努めるとともに、不登校児童生徒に対しては個別の支援計画を作成し、組織的に対応している。	/	3.4	3.4	/	3.6	3.5
		② いじめの未然防止、見逃しゼロに向けた組織的な対応と児童生徒一人一人が主体となって活躍できる魅力的な学校・学級づくりに努めている。	/	3.6	3.5	/	3.7	3.6
		③ 児童生徒のニーズに応じた心のケアのため、保護者やSC、SSW、関係機関と連携し組織的に対応している。	/	3.6	3.7	/	3.8	3.8
(2)	道徳教育の充実	④ 道徳教育推進教師を中心として、道徳教育全体計画「別業」の活用を図り、学校・家庭・地域と一体となった組織的な道徳教育を推進している。	/	3.1	3.0	/	3.2	3.2
成果と課題 ○不登校児童への対応をチームで行うことで改善傾向に導けた。「担任に任せきりにしない」を合言葉に全職員で対応できた。(小学校) ○生徒指導主事を中心にケース会議を開催し、対象になった児童について定期的な振り返りを行うことで、組織的な指導改善を行うことができた。(小学校) ○不登校やいじめへの対応に関して関係機関と連携し、生徒指導委員会にて情報共有を密に行った。(中学校) ○アンケートの結果を受けて教育相談を定期的に設定したことで、トラブルの未然防止に成果があり、生徒・保護者との信頼関係づくりにつながった。(中学校) ○道徳教育推進教師を中心に、研修の伝達講習や情報共有の場を設定し道徳教育の向上を図った。(小学校) ▲道徳教育の学校・家庭・地域と一体となった組織的な推進については、今後も充実させていく必要がある。(小・中学校) ▲ふくしま道徳教育資料集の有効活用が課題である。(小・中学校)								

3 健康マネジメント能力の育成 (数値目標3.5)			10月調査			2月調査		
			幼稚園	小学校	中学校	幼稚園	小学校	中学校
(1)	体力の向上と運動習慣の定着	① 【幼稚園】「幼児期運動指針」を踏まえ、主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動を生活全体の中で確保している。 【小・中学校】「ふくしま児童期運動指針」(小)や「体力向上推進計画書」(小・中)を踏まえながら、全職員で共通理解を図り、取組を行っている。	3.3	3.3	2.9	3.5	3.4	3.2
(2)	食育の推進	② 【幼稚園】園全体で組織的に食育に取り組んでいる。 【小・中学校】「食に関する指導の全体計画」に基づき、組織的に食育に取り組み、食育の授業を実践している。	3.3	3.6	3.5	3.4	3.9	3.6
(3)	健康の保持増進を図る保健教育	③ 自己の健康課題解決のために、自分手帳を活用している。	/	3.4	3.2	/	3.5	3.4
成果と課題 ○「体力向上推進計画」や「食に関する指導の全体計画」を全職員で共有している。計画に基づき関係機関との連携を図りながら、効果的な取組ができた。(幼稚園、小・中学校) ○担任、養護教諭、栄養教諭の連携で、自己マネジメントを意識した食育を行うことができた。(小・中学校) ○体育的な活動を多く取り入れていることもあり、体を動かす習慣が身についている。(幼稚園) ○部活動を合同で行い、体力の向上を図った。(中学校) ○自分手帳を教育課程に明記し計画的に取り組んだことで、自己の健康課題や成長を自覚する児童生徒が増えた。継続して取り組んだことで、個々のデータが蓄積され、自分手帳活用の効果が高まった。(小・中学校) ▲肥満傾向児出現率の改善に向けて、養護教諭が中心となり担任や栄養教諭等と連携しながら個別指導を行い、指導内容を家庭と共有している。生活習慣の改善には、家庭・地域を巻き込んだ取組が必要である。(小学校) ▲食育に関して、受け身的な態度が見られることが課題であるため、さらに主体的な態度、感謝の心を育みたい。(小・中学校)								

4 特別支援教育の充実 (数値目標3.5)			10月調査			2月調査		
			幼稚園	小学校	中学校	幼稚園	小学校	中学校
(1)	多様な学びの場の充実・整備の推進	① 各種訪問や特別支援学校のセンターの機能による支援を積極的に活用し、計画的に校内(園内)研修を行うことで、特別支援教育の理解推進と教員の専門性の向上に努めている。	3.5	3.1	2.9	3.3	3.4	3.2
		② 交流及び共同学習の実施にあたっては、幼児児童生徒の個別の教育支援計画や個別の指導計画を活用し、担当者間で指導目標や指導内容、個に応じた支援について共通理解を図り、実態に応じた指導を行っている。	3.7	3.4	3.2	3.4	3.5	3.4
(2)	切れ目のない支援の充実	③ 「個別の教育支援計画作成・活用啓発リーフレット」を活用し、計画の作成及び引継ぎ・活用の意義について保護者の理解を促すとともに、本人・保護者の同意と参画に基づいた個別の教育支援計画の作成に努めている。	3.6	3.4	3.2	3.6	3.6	3.2
		④ 幼児児童生徒にとって必要かつ適切な支援が切れ目なく提供されるよう、個別の教育支援計画の記載内容を定期的に評価・改善し、進級時や進学先に引き継いでいる。	3.8	3.6	3.5	3.7	3.6	3.4

成果と課題	<p>○園内研修で特別支援教育を取り上げ、発達の課題に応じた支援についての実践研究を行った。外部講師による指導助言により、より適切な支援のあり方について研究を深めることができた。(幼稚園)</p> <p>○相談支援・研修支援の活用によって、教師自身が「特別支援教育の今」をアップデートする必要性を痛感したことが成果である。学ぼうとする機運が高まっている。(小学校)</p> <p>○個別の教育支援計画および個別の指導計画の内容を保護者と共有することで、家庭の理解のもと、生徒の良さを引き出す教育活動につなげることができた。(中学校)</p> <p>▲個別の教育支援計画の作成に向け、保護者面談を計画的に実施した。保護者と連携する中で、園と家庭が同じ目標に向かっていくことに難しさがあった。(幼稚園)</p> <p>▲来年度は、地域支援整備体制事業を積極的に活用したい。(小・中学校)</p> <p>▲作成した個別の指導計画を日々の教育活動に効果的に反映させることが課題である。(小学校)</p> <p>▲小学校からの引き継ぎで、個別の教育支援計画が必要であろう生徒でも申し送りがなく苦勞する場面があった。(中学校)</p>
-------	---

5 学校教育を支える基盤の確立 (数値目標3.5)			10月調査			2月調査		
			幼稚園	小学校	中学校	幼稚園	小学校	中学校
(1) 教職員の服務・勤務の確立と適正な人事管理	①	教職員人事評価について、全教職員が理解し、適切に運用している。	3.7	3.7	3.4	3.8	3.9	3.8
	②	教職員組織を生かして働き方改革を推進し、職場環境の改善に努めている。	3.1	3.4	3.2	3.3	3.6	3.5
(2) 学校事故防止の徹底と不祥事の絶無	③	校内服務倫理委員会に、工夫改善を加え、効果的な取組としている。	/	3.4	3.3	/	3.6	3.8
	④	「信頼される学校づくりを職場の力で」を活用している。	/	3.7	3.6	/	3.9	3.8
(3) 地域と共にある学校づくりと関係機関との連携強化	⑤	地域住民・保護者が、学校(園)の経営方針について理解できるよう広報に努めている。	3.4	3.6	3.3	3.4	3.8	3.6
	⑥	学校評価を適切に行い、その結果を公表している。	3.8	3.7	3.4	3.8	3.9	3.6
	⑦	学校運営協議会等による学校、保護者、地域の連携促進に努めている。	3.5	3.6	3.6	3.4	3.8	3.6
成果と課題	<p>○学校運営協議会での取り組みを園の経営・運営の基盤強化につなげることができた。(幼稚園)</p> <p>○保護者からの評価、要望を保育に生かすことができた。(幼稚園)</p> <p>○地域学校協働活動を充実させることで、「地域の力」を教育活動に活かすことができた。(小学校)</p> <p>○人事評価を活用し、学校経営に沿った自己目標の設定と達成に向けたPDCAサイクルにより、教職員が一丸となった体制を構築できた。(小学校)</p> <p>○教職員組織を生かして、縦と横の連携を大切にされた職場環境を整えることで、前年度よりも超過勤務時間を削減することができた。(中学校)</p> <p>○服務倫理委員会を工夫することで、不祥事を未然防止できている。(小・中学校)</p> <p>▲不祥事を自分事として捉えることができるような取り組みを推進し、自校から不祥事を根絶することが課題である。(小・中学校)</p>							

6 幼児教育の充実と幼小連携の推進 (数値目標3.5)			10月調査			2月調査		
			幼稚園	小学校	中学校	幼稚園	小学校	中学校
(1) 幼児の主体的な活動としての遊びの充実	①	幼児が身近な環境に主体的に関わり試行錯誤したり考えたりする遊びが連続・発展する環境構成や教師の関わりを工夫している。	3.5	/	/	3.7	/	/
(2) 幼小連携の取組の推進	②	幼小の教育のつながりを踏まえ、架け橋のカリキュラム(小:スタートカリキュラム、幼:アプローチカリキュラム)を編成し、実施している。(1月は評価・改善している。)	2.9	3.4	/	2.9	3.5	/
	③	幼稚園、小学校間で、相互の教育の内容や方法に関して話し合う機会(計画)を設定している。※合同研修会、就学時や入学時等の対話等を含む	3.4	3.4	/	3.7	3.6	/
	④	【幼稚園】「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を具体的な姿で捉え、研修や交流の機会等で子どもの姿を共有するように努めている。 【小学校】「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を踏まえ、生活科を中心に合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定を工夫している。	3.3	3.2	/	3.4	3.3	/
成果と課題	<p>○公開保育や研究協議を通して、幼稚園での学びを知ってもらうことができた。(幼稚園)</p> <p>○「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」をもとに子どもたちの姿を共有することで、円滑な接続につながるようにした。(幼稚園)</p> <p>○園児と児童の交流活動や幼稚園の先生方との情報交換を行い連携を深めることができた。(小学校)</p> <p>○入学児童の情報引継ぎ会を年間行事予定に位置付け、計画的に実施することにより、4月からのスムーズなスタートにつなげている。(小学校)</p> <p>○幼小間での交流の機会を教育課程に位置付け、定期的に話し合う機会を設け、効果的な交流活動を行うことができた。(小学校)</p> <p>▲合同研修や対話の機会を作っていくことが難しい。(幼稚園)</p> <p>▲幼小の接続を考慮したカリキュラムや教育計画が十分に整備されていない。(幼稚園・小学校)</p>							